

十日町の織物文化

十日町には、古くから植物繊維や動物繊維など多様な織物文化が根付いている。何世紀にもわたって、この地域は全国的に人気の高い織物を生産してきた。

この地域で最も古い織物は、およそ 7,200～5,400 年前の縄文時代前期のものである。信濃川流域の湿原に多く生育する草本植物、苧麻（ちよま）を原料としていた。現在では「越後アンギン」と呼ばれるこの厚手の織物は、より細かく織られた「越後上布」とともに現在でも作られている。1670 年代に開発された「越後縮」と呼ばれる薄手の縮緬は、この地方を代表する名産品となった。幕府の役人や上流階級の武士たちは、夏の衣服として越後縮を欲しがった。

越後縮や越後上布は、室内で過ごす長い冬の間、十日町の家々の女性たちによって作られた。彼女たちは家計の足しにするため、生地を問屋に売った。

19 世紀になると、人々の嗜好が絹に移り、苧麻織物の需要は減少していった。これに対応するため、十日町も絹織物を採用したが、絹織物は製造工程が複雑なため、副業的な労働力ではなく、専属の職人が必要だった。そのため、機織りの多くは個人の家から、専門的な労働力を持つ機屋へと移行していった。十日町の機織り職人たちは、生産工程のすべての段階において、昔も今も訓練を受け続けている。

新たな絹織物会社からは、今日でも高く評価されている明石ちぢみのような革新的な織物が生まれた。緯糸にしっかりと撚りをかけることで、独特の縮緬（ちりめん）状のシワができ、湿った肌にくっつきにくく、風通しがよいため涼しいのだ。